

なぜキリスト教はコーランを 誤解したのか？

矢内 義 顕

はじめに⁽¹⁾

2013年4月15日に起きたボストン・マラソン連続爆破テロ事件の犯人は、生前、周囲に「聖書はコーランの安っぽいコピーだ」「米国は聖書をアフガニスタンやイラクを侵略する口実に使っている」と語っていたという⁽²⁾。もちろん、ここでは、爆破テロの犯人がいかなる意味でこの発言をしたのか、あるいは本当にこうした発言をしたのかを、問おうとは思わない。注目したいのは、「聖書はコーランの安っぽいコピーだ」という発言である。なぜなら、かつてキリスト教の世界では、まさしくこれと反対のことが主張されていたからである。コーランは、ムハンマドによって神の言葉として捏造された書物である、ムハンマドが旧約聖書と新約聖書から恣意的に選んだ箇所を、彼自身の異端的な教説を加えた書物である…。先の言葉を使うならば「コーランは聖書の安っぽいコピーだ」ということになろう。なぜキリスト教世界は、コーランをこのよう

(1) 本稿は、2013年6月15日に銀座の教文館で行なわれた第21回キリスト教文化講演会の講演、および早稲田大学商学部で2013年秋学期に開講された総合教育科目「現代の諸問題：文明の衝突を超える」で行なった講義の原稿を改稿したものである。商学部および他大学の教員によるこの講座では、厚東偉介教授も講義を担当された。

(2) 毎日新聞2013.4.22朝刊「容疑者が反米発言 聖書、イラク侵略に使用」

に理解／誤解したのだろうか。この問題を考えるために、まずキリスト教の歴史の中から三人の思想家を取り上げ、コーランに関する彼らの発言を見ることにしよう。

1. ダマスコススのヨアンネス、ペトルス・ウェネラピリス、ニコラウス・クザーヌス

(1) ダマスコススのヨアンネス (Johannes Damascenus 675頃-750年頃)

第一に挙げるのは、イスラームと対決した最初のキリスト教神学者ダマスコススのヨアンネスである⁽³⁾。彼は、ムハンマド (570年頃-632年) の死後間もなく成立したウマイヤ朝の治世下 (661-750年) で、シリア・ダマスコの名家に生まれた。アラブ人出身であり、本来の名前はマンスール (Mansur) である。ギリシア語による高度な教育 (自由学芸・文学・神学) を受け、カリフの宮廷で「主席顧問官」という地位に就く。しかし、東ローマ皇帝レオン三世の聖像画破壊運動に関連した出来事から、その職を辞し、パレスチナの聖サバ修道院に入り、ヨアンネスと名乗ることになる。彼は、この修道院で執筆活動を行ない、神学的主著『知識の泉』など多数の著作を生み出す。この『知識の泉』は、キリスト教教義を説くための前提としての論理学・哲学的な概念を説明する『哲学的断章』そして『異端論』と『正統信仰論』⁽⁴⁾の三部から成っている。第二部の『異端論』は、キリスト教の初期から、彼の時代に到るまでの103の異端を列挙し、論駁するものである。その101番目つまり、彼にとって最近の異端一に挙げられるのが、「ハガル派・イシュマエル派の異端」つまりイスラームである⁽⁵⁾。その一部を引用しよう。

(3) 彼の生涯について詳しくは、若林啓史『聖像画論争とイスラーム』知泉書館、2003年、pp. 63-84 参照。

(4) 中世思想原典集成3『後期ギリシア教父・ビザンティン思想』編訳|監修=大森正樹、平凡社、1994年に、その一部 (小高毅訳) が収録されている (pp. 589-716)。

(5) テクストは、J. P. Migne, *Patrologia Graeca* 94 (Paris 1864) col. 764A-773A に収録されている。

またイシュマエル派の異端もあるが、これは今日まではびこり、人々を誤謬のうちに捕らえており、アンチ・キリストの先駆者である。彼らは、ハガルがアブラハムに生んだイシュマエルの子孫であり、そのため、ハガル派ともイシュマエル派とも呼ばれる。また彼らはサラセン人とも呼ばれる。これは「サラによる窮乏」(Sarras kenoi)に由来する。というのも、ハガルが天使に「サラが私を窮乏へと追いやったからです」(創世記16章8節)と言ったからである。この者たちは、偶像崇拝者で、明けの明星つまりアフロディテを崇拝していたが、これは彼ら自身の言葉ではカバル(Khabar) —偉大なという意味—と呼ばれていた。下って皇帝ヘラクレイオス(在位610-41年)の時代になると、彼らは並外れた偶像崇拝者になった。この時代から今日に至るまでに、彼らの間にマメド(Mamed)という名の偽預言者が登場した。この男は、偶然に旧約・新約聖書などを知った後、アレイオス派の修道士と親しくなり、彼自身の異端を捏造した。そして彼は、敬虔を装って民衆にとりいり、ある書物が彼のもとに天から下ったと言いふらした。彼は、この書物の中に馬鹿げた創作を書き記し、崇拝の対象として民衆に与えたのである⁽⁶⁾。

ヨアンネスは、イスラームを、偽預言者マメド(ムハンマド)が捏造したキリスト教内部の異端の一つと見なす。そして、イスラームが神の言葉と信じるコーランを、旧約・新約聖書およびアレイオス派の異端の知識に、彼自身の「馬鹿げた創作」を加えた書物であると断じる。

(2) ペトルス・ウェネラビリス (Petrus Venerabilis 1092/94-1156)

東方世界から西方世界に移ろう。ここで取り上げるのは、12世紀に南フランスで隆盛を極めたクリュニー大修道院の院長ペトルス・ウェネラビリスであ

(6) *Ibid.*, col.764A-765A.

る⁽⁷⁾。27歳の若さで2000にも及ぶ分院を指導するクリュニー大修道院長となった彼は、この時代のキリスト教世界における最も重要な人物の一人であったと言ってよい。彼が活躍したのは、グレゴリウス教会改革、そして第一回十字軍（1096-99年）と第二回十字軍（1147-49年）の間の時代でもある。このペトルスは、西欧世界において最初にコーランのラテン語訳を企画し、実行した人物としても知られる。

1142年3月、ペトルスは、アルフォンソ7世の招きに応じてスペインを訪れる。この旅行中に彼は、イベリア半島におけるイスラーム支配の現状を目の当たりにし、ムスリムを改宗へと導くためには、イスラームの研究が不可欠であることを痛感する。そこで、彼は、ケトンのロベルトゥスをはじめとして、当時アラビア語の哲学・科学（錬金術・占星術も含む）文献の研究のためにトレドに滞在していた研究者たちに、コーランを含むイスラームの文献の翻訳を依頼する。こうして出来上がったのが『トレド集成』（Corpus toletanum）と呼ばれるものである。ペトルスは、この翻訳をもとにして、『サラセン人の異端大要』および『サラセン人の異端論駁』を執筆する⁽⁸⁾。ここでは、『サラセン人の異端大要』の一節を紹介することにしよう。

（異端の修道士）セルギウスは、われわれの救い主が神であることを否定した彼の師ネストリオスの解釈に従い、あるいは自己流の理解によって、マフメット（Mahumet）に旧約聖書と新約聖書を説明し、同時に外典の作り話をたっぷりと教え込み、彼をネストリオス派のキリスト教徒に仕立て上げた。…

(7) ペトルス・ウエネラビリスに関して詳しくは、D. Iogna-Prat, *Order and Exclusion: Cluny and Christendom face Heresy, Judaism, and Islam (1000-1150)*, Translated by G. R. Edwards, Cornell University Press, 2002参照。

(8) テクストは、J. Kritzeck, *Peter the Venerable and Islam*, Princeton, 1964; *Petrus Venerabilis, Schriften zum Islam*, ed., R. Gleis, Altenberg, 1985に収録されている。また『サラセン人の異端大要』の翻訳は、矢内義顕「ペトルス・ウエネラビリス『サラセン人の異端大要』」文化論集23号（2003）、pp. 23-46にある。

さらに、ユダヤ人もこの異端に結びつけられた。ユダヤ人は、彼が真のキリスト教徒にならないようにと、密かに準備していたので、聖書の真理ではなく、彼らが今日もおふんだんにもっている作り話を、新奇なことを渴望するこの男に吹き込んだ。こうしてマフメットは、ユダヤ人と異端者という何とも優れた教師たちの手助けによってコーランを起草し、ユダヤ人たちの作り話と異端者たちの呪詛からなる邪悪な書物を、彼一流の野蛮な仕方でも編んだのである⁽⁹⁾。

ペトルス・ウェネラピリスも、コーランがネストリオス派の異端的な聖書解釈とユダヤ教の作り話を満載した、ムハンマドによって捏造された書物であると考えた。この『サラセン人の異端大要』の中でペトルスは、次のような興味深い発言をする。

彼ら（サラセン人）は、私たちと同じことを信じているところもあるが、多くの点で私たちとは一致しないことから、私はこの者たちを異端者 (haeretici) と呼んでいるけれども、むしろもっと強く、不信仰者 (pagani)、異教徒 (ethnici) と呼ぶほうが適切かもしれない。というのも、彼らは、真の神について幾らかは語るけれども、多くの誤ったことも述べ、また洗礼、聖餐、告解、つまりキリスト教の秘跡を共有することもなく、こうしたことは、この異端以外にはなかったことだからである⁽¹⁰⁾。

ここでペトルスは、イスラームがキリスト教の異端ではなく、「不信仰者」「異教徒」、つまり異なる宗教ではないのか、という疑念を表明している。コーランを熟読した人物ならではの発言である。しかし、彼はこの疑問を打ち消すかのように、『サラセン人の異端論駁』を執筆する。この書物の中で、彼はキ

(9) Summa totius haeresis Saracenorum, 7.

(10) *Ibid.*, 12.

リスト教徒に向かって、「私はあなたがたに切に願います。どうか（サラセン人には）われわれのうちのある人々がしばしば行なうように、武器に訴えるのではなく、言葉によって、武力ではなく理性によって、憎悪からではなく愛をもって対していただきたい⁽¹¹⁾」と述べる。上述のように第一回および第二回十字軍の時代にあっては、銘記してよい言葉であろう。

彼の企画によって翻訳された最初のラテン語訳コーランは、1698年にイタリア人ルドヴィコ・マラッチ（1612-1700年）が新しい翻訳を出版するまで、西欧世界で読まれることになる⁽¹²⁾。そうした人々の中には、次に述べるニコラウス・クザーヌスもいたし、また16世紀には印刷・出版され、宗教改革者ルターもメランヒトンもこれを活用する⁽¹³⁾。

(3) ニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus 1401-64年)

最後に取り上げるのは、15世紀ドイツの哲学者・神学者、教会改革者である枢機卿ニコラウス・クザーヌスの晩年の著作『コーランの精査』である。

(11) *Contra sectam saracenorum*, I, 24: Aggredior inquam vos, non, ut nostri saepe faciunt, armis sed verbis, non vi sed ratione, non odio sed amore.

(12) 中世ヨーロッパにおいては、ペトルス・ウェネラピリス以後、コーランのラテン語訳は二回行なわれる。トレドのマルコスによって1120-21年頃に完成された翻訳、そしてもう一つは、セコビアのフアン（1393頃-1458年）による翻訳である。しかし、前者については6写本しか残されておらず、後者については断片しか残されていない。これらについて、詳しくは、cf. Marie-Thérèse d'Alverny, Deux traductions latines du Coran au Moyen Age, in: *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen age* 22-23 (1947/48) pp. 69-131 (Reprinted in: *La connaissance de l'Islam dans l'Occident médiéval*, Variorum 1994); T. Burman, Tafsir and Translation: Robert of Ketton, Mark of Toledo, and Traditional Arabic Qur'an Exegesis, in: *Speculum* 73 (1998), pp. 703-732; J. M. Gázquez, Óscar de la Cruz, C. Ferrero, N. Petrus, Die lateinischen Koran-Übersetzung in Spanien, in: M. Lutz-Bachmann/A. Fidora (Hrsg.), *Juden Christen und Muslime: Religions-Dialoge im Mittelalter*, Darmstadt, 2004, pp. 27-39; R. F. Gleis (Hrsg.), *Frühe Koranübersetzungen. Europäische und außer-europäische Fallstudien* (BAC 88), Trier, 2012.

(13) ルターに関しては、L. Hagemann, *Cristentum contra Islam. Eine Geschichte gescheiterter Beziehungen*, Darmstadt, 1999, pp. 81-95 [L・ハーゲマン『キリスト教とイスラーム対話への歩み』八巻和彦・矢内義顕訳、知泉書館、2003年、pp. 134-159]; メランヒトンに関しては、M・H・ユング『メランヒトンとその時代』菱刈晃夫訳、知泉書館、2012年、pp. 201-210.

1453年、トルコの攻撃によってコンスタンティノープルが陥落する。ビザンツ帝国が滅亡するのである⁽¹⁴⁾。この直後、クザーヌスは諸宗教の対話を目指す『信仰の平和』を執筆し⁽¹⁵⁾、また友人のセコビアのファン⁽¹⁶⁾に宛てた書簡で「私たちは、彼ら（ムスリム）の間で権威をもっているあの書物（コーラン）を、私たちにとって意味のあるものとするに絶えず努めなければならない。なぜならば、私たちは、その中に私たちにとって役立つ箇所を見いだすのであり、また私たちの立場と矛盾する他の箇所は、前者（役立つ箇所）を用いて説明できるからだ」⁽¹⁷⁾と述べ、コーランの研究の必要性を提案する。この計画は、彼の晩年（1460/61年）に実現する。それが『コーランの精査』である⁽¹⁸⁾。本書の意図は、コーランをいわば^{ふるい}篩（ふるい）にかける（cribrare）ことにより、そこから聖書の真理（福音）と一致する要素を取り出すことであり⁽¹⁹⁾、その意味でイスラームとの対話の糸口を見いだそうとする試みではある。しかし、クザーヌスのコーラン観は以下の言葉に明確に述べられるとおりである。

(14) Cf. Morimichi Watanabe, *Nicholas of Cusa. A Companion to His Life and Times*, ed. G. Christianson and Th. M. Izbicki, Ashgate, 2012, pp. 40-45.

(15) 邦訳として、ニコラウス・クザーヌス『信仰の平和』八巻和彦訳（中世思想原典集成17『中世末期の神秘思想』編訳 | 監修小山宙丸、平凡社、1992年、pp. 577-644所収）がある。

(16) Cf. M. Watanabe, *op. cit.*, pp. 198-203. 最近、セコビアのファンのイスラーム論駁書が出版された。*Johannes von Segovia, De gladio divini spiritus in corda mittendo Sarracenorum* Teil I, II, Edition und deutsche Übersetzung mit Einleitung und Erläuterung von Ulli Roth, (Corpus Islamo-Christianum Series Latina 7) Harrassowitz Verlag, 2012.

(17) *Epistula ad Ioannem de Segobia*: Unde videtur quod semper ad hoc conandum sit quod liber iste, qui apud eos est in auctoritate, pro nobis allegatur. Nam reperimus in eo talia quae serviunt nobis; et alia quae contrariantur, glosabimus per illa. テキストは、*Nicolai de Cusa Opera Omnia*, Vol. VII, Leipzig/Humburg, 1970に拠る。本書簡の最新の研究として、W. A. Euler und T. Kerger (Hrsg.), *Cusanus und der Islam*, Paulinus, 2010がある。

(18) 本書について詳しくは、L. Hagemann, *Der Kur'an in Verständnis und Kritik bei Nikolaus von Kues. Ein Beitrag zur Erhellung islamisch-christlicher Geschichte* (FThSt 21), Frankfurt, 1976参照。

(19) *Cribratio Alkorani* Prologus 10, 1-2. テキストは、*Nicolai de Cusa Opera Omnia*, Vol. VIII, Leipzig/Humburg, 1986に拠る。

それゆえ、真の神とは異なる者がその（コーランの）著者ということになる。それは「この世の神」（コリントの信徒への手紙二・4章4節）以外ではありえない。…この神は、ウェヌスを拝む偶像崇拝者であり、この世のすべてのものを欲するマフメットゥス（Mahumetus）が自分の目的のために最適であることを知ると、彼の天使たちの一人で、光の姿をとり、おそらくガブリエルと名乗った天使によって、まずマフメットゥス、ついで彼の後継者たちを介して虚偽に満ちたコーランを編集した。さらに彼は、このために適切な助言者として異端キリスト教徒と邪悪なユダヤ人をマフメットゥスに結びつけた。彼らは、ネストリオス派のセルギウスとヤコブ派のパヘイラ、ユダヤ人フィニエス、そして後にアブドラと呼ばれる、名をサロンというアブディアだった。これらはアラブ人たちの下で信頼されている歴史が語ることである。さらに、コーランには、律法と福音書、預言者アブラハム、モーセ、特に処女マリアの子イエス・キリストを賞賛する多くの証言が含まれているように見えるにもかかわらず、真のまた救いの目的に矛盾することもすべて伴っているので、…むしろ欺くために、これらの賞賛が挿入されたと思われる⁽²⁰⁾。

クザーヌスも、コーランを、旧約・新約聖書の内容も含みながら、異端的な思想を盛り込んだ書物であるとし、しかも、その真の作者は、ムハンマドでも、それを編纂した彼の後継者でもなく、「この世の神」つまり悪魔であると断じている。

本書が執筆された直接の動機は、1460年1月にマントヴァの会議で教皇ピウス二世（1405-64年）がトルコへの十字軍を提唱したことにある。もちろん、ヨーロッパの諸侯はこれに反対であったし、クザーヌスをはじめとする枢機卿たちも乗り気ではなかった。そうした中で、クザーヌスは、コーランを誠実に

(20) *Ibid.*, I, c. I, 23.

解釈し (pia interpretatio)⁽²¹⁾、ムスリムをキリスト教信仰に導くための「手引き」(manuductio)として本書を執筆したのである⁽²²⁾。彼が望んだのは軍事的攻撃ではなかった。しかし、ピウス二世は自ら軍事的行動の準備を進める。1464年8月11日、クザーヌスは十字軍の集合地であるアンコナに向かう途中、トデイで歿する。そしてピウス二世自身も、この三日後にアンコナで歿する⁽²³⁾。以後、西欧世界が十字軍を企てることはない。

ここまで取り上げた三人の思想家は、その時代においては、イスラームを理解しようと試み、コーランを読んだ人々である。にもかかわらず、彼らは、イスラームを、アレイオス派、ネストリオス派そしてユダヤ人の影響を受けた異端と見なす。それゆえ、コーランは、そうした異端思想に汚染されたムハンマドが、旧約聖書と新約聖書の内容をゆがめ、神の言葉として捏造した書物だと考えたのである。彼らがこのように考えたのも、ある意味では、無理からぬことだったかもしれない。というのも、確かに、コーランの中には旧約聖書および新約聖書と一致する物語が見いだされ、さらに、そうした物語の中には、聖書の伝承と異なる内容が見いだされるからである。次にこの問題に移ることにする。

2. コーランと聖書

コーランは、ムハンマドが神アッラーから受けた啓示を、彼の死後、編集し、書物にまとめたものとされている。全体は、114章(スーラ)に分けられ、その各々には、表題がつけられている。その中には「ユヌス」「ユースフ」「マールヤム」と題される章がある。ユヌスとはヨナ、つまり旧約聖書の預言者で

(21) *Ibid.*, II, c. I, 86, 4; c. XII, 119, 1; c. XIII, 124, 3-4.

(22) Cf. *Ibid.*, II, c. V, 99-c. VII, 106.

(23) Cf. M. Watanabe, *op. cit.*, pp. 376-381.

あり、ユースフとは創世記に登場するヨセフ、マルヤムとはイエスの母マリアである。こうした聖書の登場人物は、スーラの表題だけではなく、その本文にも登場する。アダム、ノア、アブラハム、イサク、イシュマエル、ヤコブ、モーセ、洗礼者ヨハネ、そしてイエスなどである。当然、内容的にも聖書の物語と一致する物語が含まれている²⁴⁾。「ユースフ章」は、その全体が、創世記37章-50章のヨセフ物語のコーラン版と言ってよかろう。「マルヤム章」には、洗礼者ヨハネの誕生、マリアへの受胎告知そしてイエスの誕生、つまり新約聖書の「ルカによる福音書」で記されたクリスマス物語のコーラン版が語られる²⁵⁾。ここでは、この物語を取り上げることにする。

また啓典の中で、マルヤム（の物語）を述べよ。かの女が家族から離れて東の場に引き籠った時、かの女はかれらから（身をさえぎる）幕を垂れた。その時われ（アッラー）はわが聖霊（ジブリール＝ガブリエル）を遣わした。かれは1人の立派な人間の姿でかの女の前に現われた。かの女は言った。「あなた（ジブリール）に対して慈悲深き御方の御加護を祈ります。もしあなたが、主を畏れておられるならば（わたしに近寄らないでください）。」かれは言った。「わたしは、あなたの主から遣わされた使徒に過ぎない。清純な息子をあなたに授ける（知らせの）ために。」かの女は言った。「未だ且つて、誰もわたしに触れません。またわたしは不貞でもありません。どうしてわたしに息子がありましょう。」かれ（天使）は言った。「そうであろう。（だが）あなたの主は仰せられる。『それはわれにとっては容易なことである。それでかれ（息子）を

24) 聖書とコーランについて、詳しくは、J. Gnilka, *Bibel und Koran. Was sie verbindet, was sie trennt*, Herder, 2004 [J・グニルカ『聖書とコーラン どこが同じで、どこが違うか』矢内義顕訳、教文館、2012年] 参照。

25) 以下の記述に関して詳しくは、A. Neuwirth, *Der Koran als Text der Spätantike. Ein europäischer Zugang*, Berlin, 2010, pp. 472-489; M. Bauschke, *Der Sohn Marias. Jesus im Koran*, Darmstadt, 2012, pp. 14-25参照。

人びとへの印となし、またわれからの慈悲とするためである。(これは既に)アッラーの御命令があったことである。』」こうして、かの女はかれ(息子)を妊娠したので、遠い所に引き籠った。(19マルヤム16-22)²⁶⁾

聖書を読んだことのある人ならば、ただちにこれが「ルカによる福音書」のあの有名な箇所(2章26-36節)と類似していることに気づくだろう。また聖書を読んだことのない人でも、これが絵画や音楽で有名なあの受胎告知の場面であることに気づくだろう。夫ヨセフはこの箇所にも、これに続く箇所にも登場しないことから、イエスの処女降誕は当然のこととされている。しかし、これに続く話は、ルカの物語には見当たらない。

だが分娩の苦痛のために、ナツメヤシの幹に赴き、かの女は言った。「ああ、こんなことになる前に、わたしは亡きものになり、忘却の中に消えたかった。」その時(声があつて)かの女を下の方から呼んだ。「悲しんではならない。主はあなたの足もとに小川を創られた。またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ。新鮮な熟したナツメヤシの実が落ちてこよう。食べ且つ飲んで、あなたの目を冷やしなさい(=慰め喜びなさい)。そしてもし誰かを見たならば、『わたしは慈悲深き主に、斎戒の約束をしました。それで今日は、誰とも御話いたしません』と言ってやるがいい。」(同上23-26)

この話は「ルカによる福音書」はおろか、新約聖書の他の福音書にも見いだすことはできない。8-9世紀頃に成立した「偽マタイによる福音書」20章に類似の物語が語られるが、それは、イエスが誕生した後、親子三人でエジプトに赴くときの物語(cf. マタイによる福音書2章13-15節)となっている。むろ

²⁶⁾ 以下コーランの翻訳は、『日亜対訳 註解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、1983年に拠る。

ん、ムハンマドが知っていたのは、この文書のもとになった伝承であろう。いずれにせよ、コーランにおいて、イエスは、ガリラヤのナザレでもユダヤのベツレヘムにある宿屋の馬小屋（ルカ4章4-7節）でもなく、どこかナツメヤシの木が茂る所で生まれたことになっている。話はさらに聖書の物語から逸れていく。

それからかの女は、かれ（息子）を抱いて自分の人びとの許に帰って来た。かれらは言った。「マルヤムよ、あなたは、何と大変なことをしてくれたのか。ハールーン（アロン）の姉妹よ、あなたの父は悪い人ではなかった。母親も不貞の女ではなかったが。」そこでかの女は、彼（息子）を指さした。かれらは言った。「どうしたわたしたちは、揺籠の中の赤ん坊に話すことが出来ようか。」（その時）かれ（息子）は言った。「わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典（福音書）をわたしに与え、またわたしを預言者になされました。またかれは、わたしが何処にしようとも祝福を与えます。また生命のある限り礼拝を捧げ、喜捨するよう、わたしに御命じになりました。またわたしの母に孝養を尽くさせ、高慢な恵まれぬ者になされませんでした。またわたしの出生の日、死去の日、復活の日に、わたしの上に平安がありますように。」そのこと（イサー＝イエスがマルヤムの子であること）に就いて、かれら（ユダヤ教徒、キリスト教徒）は疑っているが本当に真実そのものである。アッラーに子供が出来るなどということはありえない。かれに讃えあれ。かれが一事を決定され、唯「有れ。」と仰せになれば、即ち有るのである。（同上27-35）

話の筋は、全体からすると、イエスの誕生、つまりクリスマスの物語というよりは、イエスの誕生に際して、母マリアに対する不貞の嫌疑をはらすことが中心となっているように思われる⁽²⁷⁾。この筋立ては、福音書の物語よりも、むしろ、2世紀の後半に成立した外典「ヤコブ原福音書」⁽²⁸⁾に近い。生まれたば

かりのイエスが、揺籠の中から発言したという物語は、もちろん、どの福音書にも見当たらない。それどころか、このイエスの発言は、キリスト教徒の側からすると、必ずしも受け入れられるものではない。イエスは、自分自身を「神のしもべ」「神の預言者」と呼び、さらにイエスの発言に続く言葉では、イエスが「神の子」ではなく、「マルヤム（マリア）の子」であることが強調されているからである。

新約聖書は、イエスを「神のしもべ」と呼ぶことについては、控えめな姿勢をくずさない。預言者という呼び方については、イエスが故郷の会堂で教えた際、それを聞いた人々が驚き、大工で「マリアの息子」にすぎない者がどうしてこのような知恵をもっているのかと言ったときに、イエス自身が「預言者は故郷では敬われない…」と述べた個所が想起されるだろう（マルコによる福音書6章1-4節）。しかし、イエスが神の子であることを否定することについては、キリスト教は受け入れることはできない。「マタイによる福音書」の中で、弟子たちに、「あなたがたはわたしを何者だと言うか」と問うイエスに、弟子のペトロは、「あなたはメシア（キリスト）、生ける神の子です」（16章16節）と答え、「ヨハネによる福音書」の中で、女弟子マルタは、「主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」（11章25-27節）と答えるからである⁽²⁹⁾。コーランの中で、イエスが神の子であることを否定する箇所は、ここだけではない。

啓典の民よ、宗教のことに就いて法を越えてはならない。またアッラーに就

(27) むしろ、マリアの物語にイエスの物語が組み込まれていると言ってよい。Cf. A. Neuwirth, *op. cit.*, p. 483.

(28) 本書に関しては、W・レベル『新約外典・使徒教父文書概説』筒井賢治訳、教文館、2001年、pp. 163-168参照。邦訳は、『新約聖書外典』荒井献【編】、講談社文芸文庫、1997年、pp. 23-42に八木誠一訳が収録されている。

(29) 「神の子」という呼称について詳しくは、M・ヘンゲル『神の子 キリスト教成立の課程』小川陽訳、山本書店、1988年参照。

いて真実以外を語ってはならない。マルヤムの子マスィーフ（メシア／キリスト）・イーサーは、只アッラーの使徒である。マルヤムに授けられたかれの御言葉であり、かれからの霊である。だからアッラーとその使徒たちを信じなさい。「三（位）」などと言ってはならない。止めなさい。それがあなたがたのためになる。誠にアッラーは唯一の神であられる。かれに讃えあれ。かれに、何で子があろう。（4 婦人171）

ここでは、イエスが神の子であることが否定されるだけでなく、キリスト教の重要な教義である三位一体論も否定される。このことについては、さらに次の箇所も引用すべきだろう。

「アッラーは三（位）の一つである。」と言う者は、本当に不信心者である。唯一の神の外ほかに神はないのである。もしかれらがその言葉を止めないならば、かれら不信心者には必ず懲罰が下るのであろう。（5 食卓73）

またアッラーがこのように仰せられた時を思え。「マルヤムの子イーサーよ、あなたは『アッラーの外に、わたしとわたしの母とを2柱の神とせよ。』と人びとに告げたか。」彼は申し上げた。「あなたに讃えあれ。わたしに権能のないことを、わたしは言うべきではありません。もしわたしがそれを言ったならば、必ずあなたは知っておられます。あなたは、わたしの心の中を知っておられます。…（同上116）

ここで否定された三位格は、父と子と聖霊ではなく父（アッラー）と母（マルヤム）と子（イーサー）であり、しかも、三位一体論というよりは三神論である。このように見てくると、先に述べた三人の思想家のコーランに対する批判も、まったく根拠がなかったわけではないことは、明らかであろう。そして、彼らがコーランにおいて特に注目したのが、いま挙げたような箇所であること

も当然であろう。ムハンマドは、聖書あるいはキリスト教の教義を不当に歪曲したのだろうか。この問いに答えるためには、彼が聖書あるいはキリスト教の教義をどのように知ったのかを、考えてみなければならない。

3. ムハンマドはどのように聖書およびキリスト教の教義を知ったのか

最初に述べておかなければならないことは、ムハンマドが聖書を読んでいなかった、ということである。なぜならば、ムハンマド以前にアラビア語訳の聖書は存在せず、その断片的な翻訳も9世紀のものが確認されるだけだからである⁽³⁰⁾。仮にあったとしても、ムハンマドが聖書やキリスト教関係の書物を手に入れることは、それほど容易ではなかっただろう。さらに、彼が読むことができたとしても、それはアラビア語で書かれたものに限られ⁽³¹⁾、シリア語ましてギリシア語で書かれたものは、読むことができなかっただろう。彼の得た聖書・キリスト教の知識は、口伝えの伝承によるものである。

ではどこで、そして誰から、彼はそれを聞くことができたのだろうか。考古学的な発掘から知られるかぎり、ムハンマドの時代、アラビア半島に、ユダヤ教・キリスト教が普及していたことが分かっている⁽³²⁾。それゆえ、ユダヤ人の会堂（シナゴグ）、キリスト教の教会という特定の宗教的な施設を想定することもできる。そこでは、礼拝において旧約聖書・新約聖書が朗読され、説教される。また礼拝において朗読されるさまざまな典礼文・式文、歌われる讚美歌には、聖書や教義的な内容も盛り込まれている。さらに、イスラームの伝承

⁽³⁰⁾ アラビア語訳の聖書に関して詳しくは、S. H. Griffith, *The Bible in Arabic. The Scriptures of the "People of the Book" in the Language of Islam*, Princeton University Press, 2013.

⁽³¹⁾ Cf. コーラン「16蜜蜂」103.

⁽³²⁾ M. Bauschke, *op. cit.*, S. 3. イスラーム以前のアラビア半島における宗教的な状況に関する邦語の文献としては、徳永里砂『イスラーム成立以前の諸宗教』（イスラーム信仰叢書8）、国書刊行会、2012年を挙げることができよう。キリスト教に関しては、J. S. Trimmingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, Beirut, 1990があるが、入手できなかった。

によると彼自身が特定のキリスト教徒と交際があったことも知られている⁽³³⁾。もちろん、彼らは、キリスト教に関して専門的な知識をもった神学者ではなかった。要するに、ムハンマドが生きた社会は、口頭伝承の社会であって、読書の社会ではなかったのである。

そうした環境にあって、ムハンマドのみならず、他の人々も多かれ少なかれ、旧約聖書や新約聖書の物語を知っていたと思われる⁽³⁴⁾。先に引用したコーランの冒頭に戻ってみよう。「また啓典の中で、マルヤム（の物語）を述べよ。かの女が家族から離れて東の場に引き籠った時、かの女はかれらから（身をさえぎる）幕を垂れた。…」とあった。キリスト教徒であれば、誰でも、ここから受胎告知の物語を思い起こすだろうと述べたが、この言葉を耳にした当時のマッカ（メッカ）あるいはマディーナ（メディナ）の人々も、「あの話か」と思い当たったに違いない。9世紀のイスラームの伝承によると、イスラーム以前のマッカのカアバ神殿の柱には、イエスそしてマリアのアイコンが飾られていたと言われる⁽³⁵⁾。イエス、マリアは、民衆の間でも知られていたのである。

ムハンマドが、40歳頃にマッカのヒラーの洞窟で聖なるものと出会い、その体験を語り出し、またそれに耳を傾ける人々（ムスリム）に彼が体験した神（アッラー）を語っていく中で、彼と彼の言葉を聞く人々が共通に知っている聖書の物語を取り入れ、そこに新しい息吹を吹き込んだことは、十分にあり得る。いかなる宗教であれ、無から生じるのではない。その宗教が発生する歴史的・文化的な環境によって条件づけられることを忘れるべきではない。

(33) 例えば、8-9世紀に成立したイブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註『預言者ムハンマド伝』4, 63; 5, 37-38; 5, 45; 5, 49; 5, 86-87; 5, 100-121; 7, 32-33; 9, 28; 9, 29; 12, 1-143などの諸伝承は重要であろう（翻訳は、後藤明・医王秀行・高田康一・高野太輔訳、岩波書店、2010、2011年）。cf. G. Osman, Pre-Islamic Arabs Converts to Christianity in Mecca and Medina: An Investigation into Arabic Sources, in: *The Muslim World* 95 (January 2005), pp. 67-80.

(34) 例えば、コーラン以降のイエス伝承に関しては、*The Muslim Jesus. Sayings and Stories in Islamic Literature*, Collected, Edited, and Translated by Tarif Khalidi, Harvard University Press, 2001参照。

(35) 徳永 *op. cit.*, p. 176.

それにしても、彼らが知っていたキリスト教がいかなるキリスト教であり、それを担っていたのがいかなる人々だったかという問いは残る。コーランの語っていた物語が、聖書の物語あるいはキリスト教の教義と異なるものだからである。

4. ムハンマドの出合ったキリスト教

少し歴史をさかのぼる。キリスト教は、4世紀にニカイア公会議(325年)、5世紀にカルケドン公会議(451年)という大きな教会会議を開催し、三位一体論とキリストの二性一位格という、いわゆる正統派の教義を確立する。そしてこの正統が確立する中で、それに異を唱える人々は、異端として排除される。アレイオス派、ネストリオス派と呼ばれる人々がそれである。先に述べた三人の思想家もこの人々に言及していた。彼らは、コーランがアレイオス派やネストリオス派の異端に汚染されている、と非難した。

しかし、ムハンマドが出合ったキリスト教徒が、こうしたアレイオス派やネストリオス派のキリスト教徒ではなかったことを、今日の研究が明らかにする³⁶⁾。それは、ダマスコスのヨハネスも、ペトルス・ウェネラピリス、クザースも知らなかったキリスト教徒、ユダヤ人キリスト教徒と呼ばれる人々である³⁷⁾。もちろん、これは研究者が与えた名称で、ムハンマドの時代あるはそれ以前にも、ナサーラー(nasara=ナザレ人)と呼ばれていた。実際、コーランの中でもこの名称が用いられる。

彼らの起源は、キリスト教の最初期、つまりエルサレム教会(原始教会)に

³⁶⁾ 以下の記述は、主として、J. Gnllka, *Die Nazarener und der Koran. Eine Spurensuche*, Herder, 2007 [J・グニルカ『コーランの中のキリスト教—その足跡を追って』矢内義顕訳, 教文館, 2013年] および Bauschke, *op. cit.* に拠る。

³⁷⁾ むろん、ムハンマドが出合ったキリスト教徒を、ユダヤ人キリスト教徒と見なすことに対して、異論もある。例えば、Griffith, *op. cit.* は、メルキト派、ヤコブ派、ネストリオス派のキリスト教徒を主張する (pp. 7-53特に p. 36)。

さかのぼる。イエスの死後、イエスの弟子たちは、イエスの宗教運動をさまざまな形で受け継ぎ、それを発展させる。例えば、パウロのような人は、当時の地中海世界、ヘレニズム・ローマの世界へと伝道を展開する。これがキリスト教の一般的なイメージかもしれない。これに対してイエスが生まれ、育ち、活動したパレスチナのユダヤ人たちにイエスの教えを広めていこうとする人々もいた。彼らは、ユダヤ教のさまざまな宗教的戒律＝律法（食物規定や割礼も含む）を忠実に守りながら、同時に、イエスに従う信仰をもった人々である。キリスト教は、その初期から多様性をもっていたのである。むしろ、今日、このキリスト教はもはや存在しない。

しかし、歴史のかなたに消え去ったはずの彼らの足跡を、限られた文書資料から丹念に掘り起こしていくと、この人々がイエスをマリアの子、預言者と見なしていたこと、さらには、われわれが今日手にする新約聖書に含まれる文書とは別の文書（外典・偽典）、伝承を担っていたことも明らかになる。当然、彼らの信仰は、三位一体論やキリストの二性一位格といった教義をもつ正統派のキリスト教とは異なるものであり、そうした正統派から排斥された信仰であった。そして、ムハンマドが出合ったのは、何よりもこのユダヤ人キリスト教であり、彼にとってキリスト教とは、このユダヤ人キリスト教であった。これに民間信仰が加わる。上で触れたカアバ神殿のイエスとマリアのイコンはそうした信仰の一つの表れであり、それに対して、ムハンマドはコーランの中で非難の言葉を述べたのである³⁸⁾。

もちろん、ムハンマドもキリスト教の中でさまざまな論争・争いがあったことは聞き知っていただろう。しかし、彼が教義の細かな論争について熟知していたとは思われない。彼は神学者ではない。彼は、自分が見聞きしたキリスト教をキリスト教と見なし、それをコーランで語ったのであって、意図的に歪曲

³⁸⁾ Cf. Bauschke, *op. cit.*, pp. 104-105. また、三位一体論の文化史については、Norbert Scholl, *Das Geheimnis der Drei. Kleine Kulturgeschichte der Trinität*, Darmstadt, 2006参照。

したのではない。もしビザンツの神学者あるいは西欧世界の神学者が、ムハンマドに、「あなたの語るキリスト教はおかしい」と言ったとしても、彼は、「いや私が日常的に接するキリスト教がこうなのだ」と言ったに違いない。

結 語

三人の思想家たちは、今日の視点から見ると、二重の誤解をしていたことになる。彼らは、コーランそしてイスラームを、彼らにとって既知の異端、つまりアレイオス派やネストリオス派と結びつけ、コーランが語るキリスト教、ユダヤ人キリスト教の存在に思い至ることはなかった。そしてイスラームをそれらの異端の影響を受けた新たなキリスト教の異端と見なしたため、新しい別の宗教と見なすことができなかつたのである。正統か異端かという二分法的な視点が彼らの目を曇らせたのである。それは同時に、彼らがキリスト教の中の多様性を認めることができなかつたということでもある。むろん、そこに彼らが生きた時代という制約があったと言えばそれまでである。

上述のようにニコラウス・クザヌスは、15世紀の教会改革者としても活躍した。彼の死後50年、西欧の教会には新たな異端の運動が登場する。ルターによる宗教改革である。これによって中世の異端史は幕を閉じる。宗教改革の側は、ローマ・カトリック教会を異端とし、自らを正統と見なしたからである⁽³⁹⁾。以後、キリスト教は自らの内に多様性を認めざるをえなくなる。コーランおよびイスラーム理解については、どうだろう。16世紀以降のアラビア語学の研究などの進展、そして啓蒙時代を経て、しだいにイスラームは独自の宗教と認められるようにはなる⁽⁴⁰⁾。しかし、偏見が除かれたわけでは決してない。

ボストンのテロ事件に話を戻そう。この事件が起きたとき多くの人々が、ま

(39) この点については、『宗教学事典』星野英紀他編、丸善、2010年、pp. 268-269「正統と異端」（矢内義顕）を参照。

(40) この点に関する詳細な研究は、ヨーハン・フェック『アラブ・イスラーム研究誌』井村行子、法政大学出版局、2002年；R. Leuze, *Christentum und Islam*, Tübingen, 1994, pp. 1-20参照。

たイスラーム過激派による犯行かと思った。イスラーム＝テロという偏見が定着しつつある。しかし、13億のムスリム—日本では10万、アメリカ合衆国では200-800万⁽⁴¹⁾—すべてが、テロリストであるはずがない。部分をもって全体にかえるべきではないだろう。そして何よりも、現代のイスラームが、宗教改革の時代を迎えていること⁽⁴²⁾、新たな多様性を内に含んだイスラームへと変貌しつつあること⁽⁴³⁾、このことも決して無視することはできない。

(41) Cf. 大川玲子『イスラーム化する世界—グローバル化時代の宗教』平凡社新書、2013年、pp. 2-6.

(42) Cf. レザー・アスラン『変わるイスラーム』白須英子訳、藤原書店、2009年、pp. 2-6.

(43) 例えば、大川（前掲書）は、アミナ・ワドゥードのフェミニスト的コーラン解釈、ファリド・イサクのアパルトヘイト、人種差別解放の解釈、ピラル・フィリップスのイスラーム主義への回帰、フェトフラー・ギュレンの西洋社会との協調を紹介する。